

光葉同窓会メールマガジン

<2024年12月号>



210号 2024.12.02 配信

秋桜祭に全力投球していた学生たちも学業に勤しむ日常に戻りました。同窓会も秋桜祭に参加し、多くの方にご協力いただきました。お礼申し上げます。

一年をしめくくる師走になり、残り一枚となったカレンダーに物寂しさを覚えます。学園では、ユリノキ広場のシンボルツリーやキャンパスロードの生垣がイルミネーションで飾られ、冬の訪れを知らせてくれます。クリスマスや新年の準備など、毎年のことながら、あわただしい年の暮れ、どうぞお健やかに過ごしてください。
(常任委員 表 まい子)

◇光葉同窓会生涯学習のご案内

☆講演会 「国際情勢と日本（欧州とアメリカを中心に）」 参加費：無料

講師 山崎日出男 昭和女子大学理事長

開催日時・場所 2025年1月11日(土) 13時30分～14時30分 光葉同窓会研修室

申込締切日：12月15日(日) 申込先：E-mail dousoukai@swu.ac.jp

※件名に講演会名、本文に氏名・卒年・学科・携帯電話番号を記載してください。

※申し込み後、受付返信メールをお送りします。ご確認をお願いします。

☆パン作りの会 2025年2月下旬予定

開催場所：渋谷マークシティ地下1階 渋谷東急フードショー 富澤商店 レンタルキッチン

○詳細は、ホームページおよび2025年1月配信のメールマガジン211号でお知らせします。

◇2024年度 第32回秋桜祭に参加しました 11月9日(土)・10日(日)

- ・人見記念講堂「第2緞帳物語」の展示
- ・秋桜祭 Instagram に投稿
- ・支部提供品の販売
- ・4支部の出店販売
- ・同窓生有志6グループの販売
- ・子どもコーナー



左 支部提供品
上 同窓生販売グループ
右上 展示 緞帳で使用した刺繍糸
右下 子どもコーナー



◇ホームカミングデー(昭和女子大学と光葉同窓会共催)が開催されました

11月9日(土)、退職恩師、対象学年同窓生の400人以上が参集し賑やかに行われました。会場となった大学9号館地下アリーナは、笑顔や笑い声があふれ母校での交流を楽しみました。

※光葉同窓会年末年始休業期間 2024年12月21日(土)～2025年1月8日(水)

※211号は、2025年1月15日(水)に配信します。

広げよう光の葉

土岐 純子さん

2000年卒 生活美学科卒

「花の世界に息づく建築」

学生時代、私は建築を学び、毎週毎週、設計のプレゼンテーション授業の課題に追われて過ごしていました。設計したものが形にならず、プレゼン前日は、いつも徹夜で苦しんだことを懐しく思い出します。卒業設計も上手くできなくて、若くて熱心な研究室の先生に助けていただき、何とか仕上げて卒業できました。その先生こそ、現在の学長になられた金尾朗先生です。

大学を卒業しても、私は就職もできず、建築の道にも進まず…。金尾先生には、どれだけご心配をおかけしたかわかりません。

建築を学んだことで建築から空間装飾、植物、花へと興味が移っていき、卒業してからマミフラワーデザインスクールに入り、フラワーデザインを学びました。ここは、日本で最初にできたフラワーデザインスクールです。3年間学んだ後に講師となり、教えるようになりました。

現在は、出身地の名古屋で活動しています。二人の息子が中学生になり、子育ても少し落ち着いたので、ずっと心の中であたためていた自分のアトリエ「Atelier JUNE」を2024年6月に開設しました。高校生から70歳代の方に教えています。最初は、この年齢で今からできるかしらと不安もありました。しかし、最近参加するようになった光葉同窓会愛知県支部会で先輩方とお話をし、皆さんがそれぞれの分野でいろいろとチャレンジしているのを知り、その姿を見て、勇気もらいました。

フラワーデザインは、ただ花で美しいものを作ればよいものではありません。その時、どのような場所で、誰の、どのような気持ちに寄り添うものであるのか。その心を大切に考えて作るものと生徒にはいつも伝えています。その考え方は、大学で学んだ建築を設計する時と同じでそこに住まう人がいて、はじめて建物は完成するということに通じます。違うと思っていた建築と花には、実は共通点があると改めて感じ、私を支えてくれています。

また、長年ボランティア活動として、精神科のクリニックで生け花のクラスを持っています。これは、患者さんが社会復帰をする前の活動の一つなのですが、私のクラスでは、流派や形式にとらわれずに自然を愛で、季節の花と一緒に楽しみながら生けることを大事にしています。花が大好きな人ばかりで、会話も弾み、ここでの時間に私自身も元気をもらっています。

今、花を通して活動する中でこれまで学んだ全てのことが生かされていると思います。

在学中は、人見記念講堂で世界の一流の文化に触れる機会がありました。その経験も花をデザインする時の一つの足がかりとなっています。あの苦しんだ建築と向き合った4年間。その中で私が得たものは今、花の世界で、しっかりと息づいているのです。 【End】

